

サードステージ 閲覧注意

ゆっくり霊沙

注意、死亡表現があります。

競馬が好きな人、狂ってない人は閲覧注意です。

いいんだね

目次

1

1

ウマ娘基準を軸にしております

「むかあゝしむかし、あるところにい→それはそれは強いウマ娘がおったそうなの。名はシンボリルドルフ、皇帝と渾名まであったつよゝいウマ娘」

「むかあゝしむかし、あるところにい→ガラスの脚を持ったウマ娘がおったそうなの。名をトウカイテイオー、帝王と渾名まであったつよゝいウマ娘」

「昔、あるところにそんな従姉妹達がいたものだから期待されたウマ娘がいた。そのウマ娘はデビュー戦芝1600メートルを出遅れながら差しきり、皇帝を越えるのではないかと期待されたウマ娘だった」

1 「期待はプレッシャーとなり、無茶なトレーニングを続けた結果、次のレースで壊れた。第三コーナー途中骨折、そのまま高速で頭から地面に激突」

「期待に潰されてしまったウマ娘……名はヤマトダマシイ」

この物語は1人のウマ娘とテンションが高いが主流から外されていたトレーナー
異幸太郎の物語である。

く昔く

「ねえ、ヤマトー、何で踊ったりしないのー？　ねえってばー」

「ああもう!!　テイオウは何で踊ったり歌ったりする時間が多いのに私よりも速く走れるの……」

「楽しいと思うからだよー、走るのも、踊るのも、歌うのも!!　ヤマトも楽しもうよ。ね!」

楽しい……か……

『4コーナーを回って最後の直線、凄い末脚だ!! 外からヤマトダマシイ、ヤマトダマシイ、ヤマトダマシイ1着ゴールイン!! 出遅れから見事差しきりました!!』
確かに楽しいなテイオー
レースをするのは楽しいな!

ギョッギョッ

『第三コーナー途中でアクシデント発生! ヤマトダマシイ大丈夫か。ピクリとも動かない!』

タンカダ タンカヲハバ

ケビガオレヲルカジ ヨハセ

(楽しさがようやくわかったのに……まだ私はレースに……)

出たい

（

ギ
フ
フ
フ

目が覚める

そこはターフの上ではなく、事務所のような場所だった

暗くてよく見えないのと、光がないと怖いので照明の電源を探すが、なかなか見つからず、仕方がないので扉を開ける

外は雨が降っており、周りは見渡す限り木、木、木

森の中のプレハブ小屋がポツンとある状態で、迷いそうなので仕方なく小屋に戻

り、灯りを探す

ようやく照明のスイッチを見つけそして思う

私ってこんなに目が悪かったっけ……

キラリと何かが光る

鏡だ

鏡見た時に何かと目が合う

そこには私が映らなければいけない場所に化け物が映る

「ギィアアアアアアアア？！！？！！！」

最初に映ったのは顔、青紫色の肌に飛び出た右目、半分千切れた耳に骨が見える鼻、縫った跡がくつきり見える頬に何重にも包帯で巻かれたデコ、姉のシンボリルドルフのように自慢だった綺麗だった長い髪はショートカットにされており、不揃いでワカメのようにノッペリとしていた。

そんな化け物を見て私は泡を吹きながら後ろに倒れ、気を失った……

「おーい、おきろー……起きんかいこのスットコドッコイが!!」

「ぎゃあああ!？」

叫び声をあげながら体を起こすヤマトダマシイの目の前にはサングラスをかけた怪しい男がそこにいた

「おはようございます」

「お、おはよう……」

「おはようございます！」

「お、おはようございます!!」

「はい、よーできた」

「は、はい？」

なんなのだこの人は……いきなり私に挨拶させて……

「ヤマトダマシイ、お前さんの事はよー知っとる。知っとるよー。ターフで倒れるのはさぞ無念だったろーな」

「そ、そう。ここは何処だ。何で私はこんな姿に……」

「ここか？　ここはお前さんが伝説を作る場所じゃない。そして、お前さんはゾンビイになった」

「ゾ・ン・ビー!!」

これは夢ではないのか、悪夢ではないのか……

私はウマ娘ではなく化け物になってしまったのか……

「言っておくがお前さんがレースに出れルようになるまでちーっとばかり時間がかる」

「れ、レースにまたでれるの!!」

「しかあし、ゾンビイになったことで体が色々とかわっちよる。だから鍛える。この異幸太郎様が鍛えちゃう!!」

ウマ娘の数え方は人ってアニメのセイウンスカイが言ってた

異幸太郎はゾンビランドサガの性格、能力をそのまま持ってきた感じですよ。

サードステージ 閲覧注意

著者 ゆっくり霊沙

発行日 2019 年 7 月 11 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/196349/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
